

定期船で行く離島の波止でチヌふかせ釣り

2023 年 8 月 1 日

1 / 4

釣りの魅力について、芥川賞受賞作家の開高健は著書の中で、中国の古諺として下記のように紹介しています。

一時間、幸せになりたかったら酒を飲みなさい。
三日間、幸せになりたかったら結婚しなさい。
八日間、幸せになりたかったら豚を殺して食べなさい。
永遠に、幸せになりたかったら釣りを覚えなさい。

この言葉のとおり永遠に幸せとは言えないまでも、転勤に伴う周防大島への転居をきっかけとして始めたチヌ(標準和名:クロダイ)のふかせ釣りを約30年間なんとな〜く、趣味として楽しんできました。

このたび、コラムへの寄稿を釣行レポートにしようと思い立ち、やめたつもりだったゴルフをひょんなことから6年前に再開して以来、遠ざかり気味になっていた釣行を久々に計画しました。

チヌは水深が比較的浅い沿岸域に生息しており、本土、離島を問わず、波止、砂浜、磯など様々な場所で釣れますが、釣り場をどこにしようかと思いを巡らした結果、還暦を超え足元が少々おぼつかなくなった今の自分に安全で、また、お財布にやさしくそこそこ釣果に期待がもてそうな場所ということで、定期船で離島に渡り波止で釣りをすることに決定。

そこで、今回は本土と定期船が運航されている離島の中から、昔ちょっと良い思いをしたことのある防府市野島への釣行模様をお届けさせていただきたいと思います。

なお、時折釣りの専門用語を使っていますが、ご存じであることを前提に話を進めます。

釣行先となる野島は、防府市三田尻港の南東約15km離れた海上に位置し周南諸島に属した離島で、島のほぼ全域が瀬戸内海国立公園の区域に指定されている自然豊かな島です。中でも野島の周囲は格好の釣りポイントとなっており、アジ、クロ、チヌ、石鯛など様々な魚が釣れることから、四季を通して波止や磯から釣りを楽しむ人が、定期船や瀬渡し船で島を訪れています。

また、島には夏のシーズン中、海水浴・キャンプでにぎわう津久美浜や4年に一度開催される御年祭で、神楽(三作神楽)十二の舞(神舞)が奉納される矢立神社などがあり、島内の散策も楽しむこともできます。

本土との交通機関は、レインボーあかねが、主船として一日に4往復、航海速力25ノット(46.3km/h)で三田尻港と野島港を結んでおり、行き是三田尻港発第1便となる8時30分、帰りはちょっと早めですが野島港発第3便の13時30分としました。

7時30分に家を出発し、8時に三田尻港に到着後、船内にある切符売り場にて乗船代760円(片道)と入漁料300円、ロッドケースやクーラーなどの小荷物運賃130円を支払い、暑さを避けるためそのまま冷房の効いた船内で出発を待つことに。



出発を待つレインボーあかね

定期船で行く離島の波止でチヌふかせ釣り

2023 年 8 月 1 日

2 / 4

予定時刻ちょうどに三田尻港を出発し、江泊の竜ヶ崎を過ぎ湾の外に出ると、視界が一気に開け左舷方向には、大津島や黒髪島などが、また、右舷方向遠方にはうっすらと九州が見えます。

べた凧の海を疾走し快適な船旅がもうそろそろ終わろうかという頃、左舷方向には子供が小学生の時にファミリーで海水浴を楽しんだことのある、津久美浜海水浴場・キャンプ場が、右舷方向には、今回の釣り場に決めている野島港西外防波堤とその先端の赤灯台が視界に入ってきます。

船は定刻より少し早めの8時55分に野島港に到着、野島の滞在時間は釣り場までの行き帰りの時間を含めて約4時間30分と短いため、釣り座目指してまっしぐら。他の釣り人4人とほぼ同じ速さで歩くこと約10分、新波止の中央あたりを釣り座としてただちに釣りの準備にとりかかりました。

ちなみに、私が魚釣りのターゲットとしているチヌは、真鯛と同じ由緒正しき「タイ科」の海水魚で、石鯛やキンメダイなど「タイ」とはつくがタイ科に属さない、いわゆる「あやかり鯛」とは異なった正真正銘、真鯛の親戚です。性転換する魚として知られており、生まれた時はすべて雄ですが、両性魚の時期を経て、成長（4年～5年）すると多くは雌になると言われています。成長速度は、マダイよりも遅くておおよそ1年で12cm、3

年で25cmほどになり、50cm以上になるには13年以上の月日がかかるとされ、それ以上になると個体差が大きく、体長で年齢を推定できなくなるため、釣り人の間では「歳なし」と呼ばれています。

また、生息域が北海道南部から南西諸島（奄美大島以南を除く）と広いことに加えて、付けエサを食べさせるまでの駆け引きや針に掛けてからの強い引きが楽しめ、また、春頃には産卵のため浅場に入ってきてエサを荒食いするため、数、型ともに狙えることなどから、釣り対象として人気の魚です。

当日【7月22日（土）】の潮周りは中潮、気象庁による三田尻港の潮位予測は、満潮：11時1分、干潮：5時19分、17時21分。天気は晴れているものの、日差しは薄雲のせいか幾分和らいでおり、南からさざ波が立つ程度の追い風もあったため、暑さも和らいだますまずの釣り日和となりました。

9時30分準備も整い、ボウズにならないことを祈りながら釣り開始。



左舷船窓から見える周南諸島の島々



釣り座とした、野島港西外防波堤



本日の撒餌&付けエサ、セット完了

定期船で行く離島の波止でチヌふかせ釣り

2023 年 8 月 1 日

3 / 4

まず、釣りのポイントを堤防から 10m 先と定め水深を測定後、仕掛けを半遊動としてウキ下を竿 1 本半（竿の長さ：5.3m）の底ギリギリに設定しました。

続いて、撒き餌をまいて、潮の流れと餌取の状況を観察すると、潮は緩やかに右方向に流れており、エサ取りはというとスズメダイ？が足元に群れています。このエサ取りは撒餌さで足元に釘付けすることとして、付けエサはエサ取りに弱いオキアミでスタート。

仕掛けを投入後、ウキのやや潮上に撒餌さを撒き潮流に乗せて仕掛けを流してみる。2 回目でウキが沈みひょっとして？と期待をふくらませながら合わせを入れましたが、針掛かりはせず付け餌のみになっており、同様のことが数回続きました。

しばらくして、撒餌さを撒いた直後に海面がざわついていることに気づき、沖にもエサ取りがいるのかと思い偏光グラスをかけて海面下を注視するとサヨリとウマツラハギが見えたことから、付けエサをオキアミからエサ取りに強い練餌に変更することに。

その第 1 投目、仕掛けがなじんだ後やや間があってウキがスーッと沈んでいきました。はやる気持ちを抑え完全にウキが見えなくなって合わせを入れると、今回は針掛かりして強烈な引きがあり、堤防のスリットに逃げこもうとするのを何とかこらえて釣り上げたのは、残念ながら 34cm のバリ。（標準和名：アイゴ）。続いて、同じパターンでさっき釣ったばかりの同じバリかと思えるような同型のバリが釣れた後、しばらくあたりが遠のきました。

なお、バリは引きがチヌの数倍強くやりとりを楽しませてくれますが、背びれや尻びれ、胸びれに毒を持った鋭いトゲがあるため、とにかく痛い目にあいたくない私は、釣りあげても早々に海にお帰りいただきます。

しばし時がたち、海面表層の流れにくらべ海中の流れが早くなってきたようなので、練り餌を大きくしてウキを沈めながら仕掛けを流していると、12 時頃にまたもや 38cm のバリ。今日はチヌ無理かなーとあ

きらめモードに入りかける中、仕掛けを流していると道糸がぴんと張り、やや待って合わせを入れます。まずの引きを楽しんで釣り上げたのは、スマートではありますが 32cm のチヌ。喜び勇んでもう一匹と気合を入れ、撒餌さの投入と仕掛けを流すことを繰り返しましたが、追加できずあらかじめ終了時刻と決めていた 12 時 30 分になったため、釣り道具の片づけと釣り座にこぼれた撒餌を海水で洗い流し、12 時 50 分には船着き場へ向かいました。

釣りの楽しみ方は、大自然に囲まれた雰囲気を楽しめる、釣り具メーカー等が主催する全国大会出場を目指す、ひたすら釣果を求める、など人様々ですが、私は謎解きゲームをしているような感覚で釣りを楽しんでいます。

釣りでは撒餌さを撒いてチヌをおびき寄せ、海の中で漂っている撒餌さの中に針を仕込んだ付けエサ



撒餌に群がるエサ取り



本日 3 匹目、38cm のバリ

定期船で行く離島の波止でチヌふかせ釣り

2023 年 8 月 1 日

4 / 4

を紛れ込ませてチヌに食べさせるといったことをイメージして一連の作業を行います。仕掛けや撒餌はそもそも重さが異なるうえ風や潮流の影響を受け時の経過とともに刻々と動きが変化するため、漠然と撒餌を撒き仕掛けを投入しては、釣果にありつくことが必然と少なくなります。そのため、仕掛けや撒餌の動きなどを観察して得られた情報から目に見えない海の中で起こっている状況を推理し、仕掛けの深さや撒餌の投入場所など、あーでもないこうでもないで試行錯誤しチヌが付けエサを口にするパターンを探っていきます。(集中力が続かないこともしばしばありますが・・・)



納竿間近、待望のチヌ32cm

この作業はさながら謎解きゲームのようであり、それゆえ、ウキが引き込まれていく様は、謎解きゲームの答が見つかりそれまでの作業が報われたドキドキの瞬間です。

こうしたことから、数多く釣れた場合それはそれで楽しいのですが、試行錯誤し時間をかけてやっと釣れた時には「釣れた」ではなく「釣った」という喜びから心に残る1匹となります。

今回は、数、型ともに今一歩でしたが、晴天で向かい風が吹くこともなく、天候に恵まれてストレスを感じずに釣りをすることができ、また、実質3時間の釣りでボウズを免れることができることとともに、ウキに変化があった時のドキドキ感や魚とのやり取りも楽しめたことから、忘れかけていた釣りの面白さを改めて感じる事ができた、幸せ度80%の釣行となりました。

鮎川和文